

「本色」という語をめぐつて——書論を参考に

材 木 谷 敦

はじめに

本稿は、筆者が近年において中国古典戯曲の「本色論」について検討する中で生じた、ある問題について検討を試みるものである。

「本色」という語は、辞書的には「もとの色」「本職、本業」「本来のありかた」「過度の修飾がない素材さ自然さ」「田賦の物納」を意味する（言語芸術のようなものや視覚芸術のようなものに関する評価に用いられる場合、直接には「田賦の物納」以外の意味を持ち得る）。その内、「本来のありかた」については、あるジャンルのようなもののレベルの「本来のありかた」という意味も、個人の属性としてのレベルの「本来のありかた」という意味も、読むことができると、これまでのところ考えている。

李開先（一五〇二—一五六八）「西野春遊詞序」について検討した際は、李開先の言う「本色」は、個々の戯曲作家の持ち味としての「本来性」や「らしさ」を意味するものではなく、戯曲というジャンルの「本来のありかた」を意

「本色」という語をめぐつて——書論を参考に（材木谷）

味するものであると考えた⁽¹⁾。

また、王世貞（一五二六—一五九〇）の戯曲関連言説について検討した際は、「本色」という語で個人の属性としての「本来のありかた」がマイナス価を以て語られる可能性を考えに入れて検討を進め、結果として、王世貞の言う「本色」についてはその可能性を棄却し、「過度の修飾がない素朴さ自然さ」という意味に着目することになった⁽²⁾。

そもそも、一般に、「本色」という語は個々の表現者の持ち味としての「本来性」や「らしさ」を意味することが、さらには、そのような個人の属性のレベルの「本来のありかた」が「本色」という語でマイナス価を以て語られることが、あり得たのだろうか——特に「マイナス価」の部分が重要だろう。これが冒頭に述べた、ある問題である。この問題は、筆者のこれまでの検討の具体性に関わっている。

語の意味から考える限りは、「あり得た」と見なすことができるかもしれない。しかし、語の意味から理念的に導いただけで、ある可能性を想定することや、またその想定した可能性を棄却することには、議論としての具体性を認めにくい面もあるだろう。

「あり得た」ならば、筆者のこれまでの検討に一定の具体性が認められることになり、「あり得なかった」ならば認められないことになる。そこで、この問題について検討してみたい。

検 討

先に示した問題について検討するため、次のような言説を見てみよう。李開先および王世貞と遠くない時期の人物であり、また「本色論」が展開された時代とも遠くない時期の人物である、李流芳（一五七五—一六二九）の「跋摹書帖」である（拙訳により、「」は引用者による補足などを示す）。

書法を学ぶ上では、用筆の意図を体得することが重要である。臨模して見た目がよく似ているのが巧みであると

ばかり考えないことである。しかし、臨模しなければ古人に近付けず、用筆も文字の構成も、ついに「本色」を離れることができない。臨模してこそ古人の水準にたどり着くことの難しさを知ることになる。細部のサイズまで守って、見た目がよく似るように努力したところで、「用筆の意図の体得は」ますます無理である。したがって、学ぶ者は悩み苦しむ。しかし、「臨模の対象とする」何かの書には似ていないとしても、自分自身の書からは遠く離れていると思われる。したがって、古人の書をたくさん臨模して、その難しさを苦しめなければ、自然と「本色」を次第に離れ、それによって古人のレベルに達するようになる。(3)

この「本色」を書きというジャンルの「本来のありかた」と読んだり学ぶべき「古人」の書に対して親和的な何かの概念であると読んだりすることが不可能であることは、首肯されるだろう。

それでは、どう読むべきだろうか。古人という他者の書に対するひとそれぞれの自分自身の書の関係を問題にするこの言説において、「本色」は「自分自身の書」(原文「自書」)に対して親和的であり、臨模という学習を経験する前の段階の、自分自身の書の「本来のありかた」を意味していると読める。すなわち、ここでの「本色」は個人の属性のレベルの「本来のありかた」ということになる。また、ここでは、自分の書の「本来のありかた」は、臨模によって離れるべき属性なので、マイナス側であると考えられる(4)。

先の問題に立ち返って言うならば、この言説は、「本色」という語が個々の表現者の持つ「本来性」や「らしさ」を意味し得たこと、さらには、そのような個人の属性のレベルの「本来のありかた」が「本色」という語でマイナス側を以て語られ得たことの、証左となるだろう。この言説の存在によって、先に触れた、筆者による李開先に関する検討にも王世貞に関する検討にも、一定の具体性があると言及できそうである。

書論のような言説を中国古典戯曲の「本色論」についての検討に関連付けるのは、ふさわしくないように見えるかもしれない。しかし、本稿が提示したような問題を、戯曲関連言説をはじめとする言語芸術のようなものに関する批評的言説に現れる「本色」という語に即して考えようとするれば、多義性に翻弄され、考察の過程で意味の認定とその

根拠を混同しかねない恐れがあった。その点、言語芸術のようなものとは別のジャンルの批評的言説であれば、意味をいくらか見極めやすいと思われた。それでも、画論のような言説にあつては、「本色」という語は多くの場合「もとの色」を意味するように見受けられるなどの理由で、検討の材料を選びにくかった。そこで、特に書論に着目してみたところ、たまたまこのような結果が得られたということである。

むすび

ざっと整理すれば、李流芳の言説の存在により、「本色」という語は個々の表現者の持ち味としての「本来性」や「らしさ」を意味することも、さらには、そのような個人の属性のレベルの「本来のありかた」が「本色」という語でマイナス価を以て語られることも、あり得たと考えた。特に、その意味での「本色」にマイナス価が認められたことは重要かもしれない。「本色論」に関する筆者の近年の検討には、それなりの具体性があったと考えてよいことにもなるだろう。

本稿における検討は、筆者がかつて検討したことの条件に大きく関わりと言えらるものの、「本色論」そのものには直接の関係がないとも言える。しかし、「本色」という語の多義性を考えつつ「本色論」の検討を続ける上で多少なりとも意味があると考え、本稿を終えることにする。

※ 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「中国古典戯曲の「本色」と「通俗」――明清代における上演向け伝奇の総合的研究」(平成二九～三三年度、基盤研究(B)、課題番号・一七H〇二三二七、研究代表者・千田大介)による成果の一部である。

注

(1) 拙論「李開先『西野春遊詞序』について」『中国都市芸能研究』第十六輯、中国都市芸能研究会、二〇一八年。

(2) 拙論「王世貞の戯曲関連言説における『本色』について」『中央大学文学部紀要』言語・文学・文化一二三、中央大学文学部、二〇一九年。

(3) 李流芳『檀園集』（台湾国家図書館所蔵崇禎二年刊本、国立国会図書館所蔵マイクロフィルムによる）巻十二、12b-13a。原文（句読は引用者）／學書貴得其用筆之意。不專以臨摹形似為工。然不臨摹則與古人不親。用筆結體終不能去其本色。摹書然後知古人難到。尺尺寸寸而規之。求其肖而愈不可得。故學者患苦之。然以為某書某書則不肖。去自書則遠矣。故多摹古帖而不苦其難。自漸去本色。以造入古人堂奧也。

(4) ちなみに、管見の限り、李流芳は「遊虎丘小記」（『檀園集』、卷八）においても、「江南臥遊冊題詞 虎丘」（同、卷十一）においても、「本色」という語を「本来のありかた」という意味で用いているようである（ただし、ともにプラス価）。